

昭和・平成における北見市の消長

清水昭典

まえがき

戦後北海道

北見市の人口の推移

市街地人口の減少・都市のドーナツ現象

商業地域へのコンビニの進出

地元外からの大型小売店の進出

木材とハツカの街

北見の農業

観光の変容

北見市政の今昔

まえがき

わが国の地方自治法によると、およそ都市とは、形態的に相当の人口と密集した市街地及びさまざまな職業に従う人びとを保有している状態をいうらしい。

昭和・平成における北見市の消長（清水）

しかし、かつてマックス・ウェーバーが「市民なき都市は眞の都市に非ず」という市民の主体的意識と参加が都市の内容的要件であるという指摘も都市について考える場合大切なことであろう。

この稿では、今述べたことを念頭に、戦後から平成年代に至る北海道の一地方都市である北見市の消長を検討してみたい。

ところで北海道の都市は、開拓以後明治政府・北海道庁という中央集権的な統治支配の下に置かれ、その影響を受けて特異な発達を経ってきたので、先ず地方都市の発達に大きな影響を与えた北海道の消長から簡単に述べていくこととしたい。

戦後北海道

第二次大戦で敗れ、外地・植民地を失ったわが国にとって北海道は、戦災者・引揚者などの過剰な人口を受けられ、食糧と石炭エネルギーを供給する基地として期待を集めるようになった。

また北海道には開発を進めるため、戦前から府県にはない開発事業費が支出されていたが、戦後の道開発への期待から、とくに国が果たすべき役割を明示した北海道開発法が定められ、国の直轄事業を実施する北海道開発局が設置され、道内の各地にも開発建設部が設けられ、各地に開発のための高率の補助が行われるようになった。これが北見市のような地方都市を潤すことになった。

ところが北海道の開発は、当初の見通しほど進まず、人口についてみても、昭和二二年に三八五万であった人口は、計画では三〇年に六〇〇万となる見通しが、三二年になっても四七七万に過ぎず、この年北大教授中谷宇吉郎

が北海道開発に「ドブに捨てた八〇〇億円」（文芸春秋四月号）と酷評を浴びせかけたのであった。その後昭和三八年、政府の所得倍増計画・全国総合開発計画に対応する北海道第二次総合計画が策定され、産業構造の高度化を図り、そのための北海道の拠点開発の名の下に「道央新産業都市として」小樽・札幌・苫小牧・室蘭などの地域に重点的な開発を進め、これらの地に道内各地の人口の大規模な流入をもたらすこととなった。これに対応し道内の農村地帯には昭和三六年から農業構造改善事業で農業経営規模の拡大・大型機械の導入で農村人口の流失、いわゆる過疎をもたらすことになった。

その後の北海道では、昭和四七年、第三期道総合開発計画が策定され、北海道に大工業地帯をつくり、国際水準の高度食糧生産基地の造成を目論んだが、昭和四八年のオイルショックから国の経済の低成長時代に入りこの目論み達成は不可能となった。この影響で北海道の人口は、昭和六一年五六七万をピークに減少ではあるが減少しはじめた。ただこの中で札幌・江別・岩見沢・苫小牧など道央部の都市人口の増大、北広島・恵庭・石狩などの新市昇格がみられたが、夕張市など産炭都市群の急激な人口減、函館・旭川・釧路など歴史のある都市の人口減がみられるようになった。ただ札幌から離れた十勝地方の帯広、網走地方の北見の二市はこの昭和六〇年代も人口の微増が続いていた。

北見市の人口の推移

北見市を含む網走支庁管内の人口は、昭和二二年の約三五万から急激な増勢をたどり、三八年には四五万とピークに達した。しかしその後は長期にわたり減少を続け、五七年には三七万を割ってしまった。この頃から支庁管内

は、円高による木材鉾石をはじめ資源立地型の産業の衰退、農作物の作付制限、北洋漁業漁船の制限と二〇〇海里以内の操業などに、国鉄の民営化・営林局・署の統廃合などが重なり、人口減をもたらしたのである。そのため支庁管内二六市町村のうち二〇町村が昭和五年からいよいよ過疎地域振興特別法等による過疎地の指定を受け、人口減少と町村財政の低下に対する諸措置を受けることになった。

この人口減に加え注目されることになったのは人口構成の高齢者の比率の増大であり、管内の六五歳以上の人口に占める比率は昭和六〇に一〇・七%を占めその後も増勢をたどっている。また一六歳以上四五歳までの青壮年者の管外流失が続き、その結果としての出生率も低下し、元氣な若者・乳幼児の声が町村で聴かれなくなり、これらの人びとの盛んな消費活動が低下、市街地商店の衰退をもたらした。

ところで支庁管内人口が長期的に減少する中で北見市だけはひとり増勢をたどった。昭和三五年六万七千であった人口は四五年に八万二千、五五年一〇万三千、北見市の開基一〇〇年に当たる平成七年には一一万に達した。この開基一〇〇年の祝典において、小山健一北見市長は次のように挨拶している。

「札幌圏を除く多くの市町村が人口減少に悩んでいる中、一歩一歩ではありましたが、着実に人口を伸ばし、都市としての活力を維持発展させることができましたことは、誠に喜ばしい限りであります」

この人口増は、第一に北見市が近隣の町村から離農してきた人ひとを吸収してきたこと、第二に第二次・第三次産業、中でも公共事業の土木建設事業の増大、第三に近隣の網走市に代って急成長してきた卸売企業をはじめ札幌・旭川・東京など北見市以外に本社をもつ企業が支店・出張所を北見市に進出させ、その数が二五〇社にも及んだこと、第四に北見市が学園都市の形成に努め、北見工業大学・北見大学・日赤看護大学が設立され多勢の教職

員・学生を擁することになったことが挙げられよう。

ところが、平成一二年一二月、一万二千二一人とピークに達した人口は、翌月から僅かずつではあるが減少しはじめた。そして平成一八年四月、一万の大台を割って一万九千七〇八人まで減少した。ただ表見的には北見市は同年三月五日、近隣の端野町五千五百四人、常呂町四千八百二十八人、留辺蘂町八千五百五〇人と合併、新北見市となり一二万七千六二人の人口を擁することとなった。しかしその後もしりじりと減少を重ねている。

市街地人口の減少・都市のドーナツ現象

北見市に都市らしい市街地がつくられたのは、野付牛町といっていた時代、二級町村から一級町村に昇格し、さらに町制が施行された大正五年（一九一六）である。その翌年、この町の人口が二万に達し、現在の条丁目地区にあたる市街地に約六千八〇〇人が定住し総人口の三四％に達した。時を経て昭和三五年、市人口は六万七千に達し、このうち市街地には一万三千が住み、総人口の一九・四％を占めた。この市街地が発展すると昭和三〇年代半ば、当時の伊谷半次郎市長は、郊外の農地であった小泉地区の団地造成に着手、市街地内の木材工場群を東相内に移し、北見駅一帯の国鉄官舎を当時の市街地の外辺に移した。やがて市の人口増に対応して高栄・美山・若葉・三輪・北光地区の宅地化が進み、この地区が旧来の市民や新市民を大量に吸収するようになった。また多くの卸売業者は東相内の御売団地へ、工業者は豊地の工業団地へ移り、ハッカ作付の衰退とともにハッカ工場は閉鎖された。また和洋裁学校や料理学校も姿を消し、若い女性も朝日町など郊外地の自動車学校にクルマで送迎されながら免許を取得するようになった。現在市街地には、衣料・洋品店・食品スーパー・理髪・美容室・高級菓子店・花舗など

ともにクルマを持たない高齢者向けの薬局・眼鏡・補聴器店・医療機関、受験生向けの学習塾・スポーツ器具店などが目立つようになった。平成一二年、北見市の人口は一万二千人、昭和三〇年代初期の二倍という勢いを示しながら、市街地人口は約三千三〇〇人で、総人口の僅か三%で、市街地は郊外外円へのドーナツ現象を示している。

商業地域へのコンビニの進出

平成初年から市街地にコンビニエンスストアが進出しはじめた。平成四年、道内資本のセイコーマートが南大通沿いに開店したのを手はじめにこの年五店、サンクス二店、セブンイレブン七店が開店した。年中無休、二四時間営業、売れ筋商品の徹底管理を行い、若い世代を顧客として北見市内に五三店舗を数えるに至った。コンビニの開店には、米穀、酒食品店など免許制のもとで営業活動に恵まれた場所で開催している小売業者から譲渡を受け、使用料を払わせてコンビニに加盟させる例もあったが、旧来の酒食品店の中にはコンビニとの競争に敗れて廃業する者が多く、市内に免許を持ちながら閉店している酒小売業者が一六人に及び、年金暮らしとなり、また行方不明となった者もいた。コンビニは昔からの地元小売商を吸収したり廃業を余儀なくさせたのである。

地元外からの大型小売店の進出

昭和の終り頃から平成年代に入ると、本州や道央の大型小売店が北見市に進出するようになった。これらの店舗は規模も一万平方メートル内外で品揃えも豊かで、郊外地に進出、収容台数の多い地上駐車場を備え、遠方からの

おびただしい購買者を集めるようになった。具体的には昭和五七年のきたみ東急デパート、六〇年のイトーヨーカ堂、平成四年北見メッセ、五年道東生協のスーパーマジイ、七年隣町端野町への端野東部店、それに一二年の北見サテイ（現・ポスフル北見イオン）開店などである。これらのうち昭和五七年の東急デパートは中心市街地の商業者が駅前再開発の核店舗として積極的に迎え入れたもので、バスのデポ、赤いブロックを敷きつめた駅前広場などの環境整備も行われ、駅前広場は都市環境の面目を一新した。しかしこれによって大正五年創業の地元唯一のデパートという百貨店は間もなく廃業するに至った。また昭和の末期国道三八号線沿いの自動車販売店、オイルスタンドが櫛化する新しい市街地屯田町界限に一万平方メートルに近い大型スーパーイトーヨーカ堂の進出は、市街地商業者に顧客が流出するのではと大きな懸念をもたらしたのであった。そしてヨーカ堂の附近には多くの店舗が開店、新しい街並を形成するに至った。しかし地元商業者に大きなダメージを与えたのは、北進町の夕陽ヶ丘通りに二万一千余の店舗面積をもつ北見サテイの出店であった。同店は日用品販売の広いフロアの外、サテイに出かけることがファッションになり買物をするのがステータスと思われるブランド商品を並べ、映画館や飲食店、子どもの遊び場などを併設、集客エリアを網走支庁管内のほかにも伸ばし、開店日には集客一〇万売上額二億円に達したといわれる。これに対応して既存の大型店も改装に乗り出し、激しい商戦を展開することとなった。このような状況下、北見の伝統ある大型小売店の動向を見ると、大正二年魚業の卸売業が主体となって創業したイチワ店は、昭和三〇年代、いち早くスーパー業界に参入、平成七年時には売り場面積千五〇〇平方メートル以上のベアーズ店など六店舗を経営、地元経営者の最大手となっていたが、折柄札幌から進出してきていた道内最大の大手ラルズと提携を決めやがて吸収されるに至った。また北見の中堅業者北見ショッピングセンターも、問屋筋が商品

の搬入を渋り始め閉店するに至った。

こうした激烈な商戦を展開する中、平成一九年に至って中心市街地の中核的存在であった東急デパート北見店が撤退するに至った。そのあとはテナントの食料品店、洋品店、飲食店などが集合組織「パラポ」として営業を開始、また北見市がフロアの一部を市庁舎として利用するなどしている。

こうして中心商店側にも大きな変化が現れたが、すでに平成一〇年、二番街の互いに隣接する家電販売店とレコード販売店、その向い側の時計店などが閉店、平成一五年には中心商店街の空き店舗は三〇店舗を越え、シャッターを降ろしたままの店舗が軒を連ねる光景が見られるようになった。この市街地商店街の歩行者の通行量も、平成元年には一日二万五千人あったが、一三年には一万人に減ってしまった。このような状況に商業者をはじめ商工会議所、市当局は決して手を拱いていたわけではない。たとえば、平成二二年市では商店街活性化先進事業費を予算化し、空き店舗活用事業（イベント事業）で、空き店舗を活用したフリーマーケットやミニチャレンジショップ、各種イベント事業を展開し活性化を図っている。また中心商店街のまちづくりの理念として市民の「出会い・発見・にぎわいの活力あふれる交流ゾーン」の創造」を活性化の目標として掲げイベントなども計画している。また商業振興のための市の融資を実施五十億円近い予算を計上している。このほか地域商店街リーダーの育成事業、商店街活性化アドバイザー派遣事業への補助など商店街の振興を目指したのである。

その後、平成一六年、政府の都市再生本部が、地域の資源を生かした独創的な都市再生の取り組みを支援するため、整備計画を行っている都市に六千万円を助成する措置を講じたが、多くの都市の中から北見市がこれに指定された。これと共に北見市では、一番街・二番街・大通商店街及び銀座通商店街などに接する駅周辺の再開発を進め

ることとした。期間は平成一八年から二二年までで、民間の投資が加わると三〇〇億円をこえる投資になる。駅前地区には飲食店や日用雑貨など二一〇店が四つの商店街をつくっている。だが大手スーパーの郊外地へのあい次ぐ出店で、経営環境が不振となり平成一六年にはラルズプラザ北見店が引揚げるなど空きビルやシャッターを降ろした店舗が目立つようになった。この駅前改造に先だつて進出してきたのが北見信用金庫の本店で旧「まるいいとう」百貨店の跡地に地上一〇階地下一階の美しい白亜のビルを建設した。また付近に二二戸の賃貸マンション、一五階建五〇戸の分譲マンション、一〇階建五一戸の道営住宅、スーパー・サービスタアの改築とともにその上にビルのマンションも建設され、中心市街地への居住に拍車がかかった。また駅前一帯の景観はいちじるしく立体化し北見市の面目を一新した。

木材とハツカの街

私事にわたり恐縮だが、昭和三四年のことである。北見工大に就職の斡旋をして下さった師は東京から札幌に赴任されたばかりで、私に向かわれて「君岩見市に大学が設立されるのだが赴任するつもりがありますか」といわれた。私は「はい」と答えたが、師は北見と岩見沢を混同されたのであった。それ程北見は無名の地であった。これと較べると網走は監獄のある町として、とくに高倉健主演の映画「網走番外地」で有名であった。そこで私は「北見」は北海道の何処にあるのですか」と聞かれると、「網走の隣町です」と答えたものであった。その後北見工大が開設されると、当時工大の開学準備をしていた北見市の職員から手紙・ハガキ・名刺をいただく、北見市のスケッチと木材とハツカの街というキャッチフレーズが添えてあつた。いまでは珍しくない街のPRだが、このアイ

デアは当時経済人上りの伊谷半次郎市長の巧みな商才だと感心し、未だ見ぬ北見の街にエキゾチックなあこがれを抱いたものであった。いまでも北見のハッカと木材は、北見を象徴することばだが、産業としてはほとんど実体を失ったといつても誤りではなからう。しかしこの両者は北見の発展とともに深くかわつてきたことを市民は誇りとしているのである。

まずハッカについてみると、ハッカは三千年も前から王者の使う香料として栽培され、明治後期にわが北見地方で栽培され始めた。新開の腐葉土を含む壤土、夏期高温で秋は大気が乾燥していること、またハッカは冷害にもよく耐えること、蒸留するときの燃料としての薪が豊富で、ハッカ油は文字通り「薄い荷」で海外まで運び易いこと、取引相場が暴騰すると他作物より「金のなる木」といわれるほど農家の収入が増大したのであった。新開の土地のみを好むので、最盛期には二万ヘクタールも作付けされ、世界の生産の八〇%を占めたのであった。大戦が始まると政府は馬鈴薯や軍馬用の燕麦の作付を強制し、これらと入れ代つてしまったのであった。戦後はブラジルのアマゾン河流域に作付が移動してしまい、北見ではほとんど作付されなくなってしまった。精製工場も解体され今では観光向けに記念館が遺され時折蒸留実験が公開されるばかりである。しかし北見の観光記念商品として商工会議所の展示コーナーに、ハッカ豆・飴・糖・油などを見ることができるとは、さまざまのハーブ類の試験栽培が市内で行われ、ハッカもこれとともに人びとが期待を寄せているのである。

北見が木材の街といわれる沿革は古くその事業の規模は大きい。明治三〇年、北見に屯田兵と土佐の北光社団体が入植してから程ない三〇年代後期、わが国の産業革命が興り、府県下の都市が発達すると木材の需要が高まった。そこで千古斧鉞を知らぬオホーツク内陸の四億石と見込まれた原生林の伐採が始まった。トド松・エゾ松・カ

ツラ・センなどが比較的安価な用材として、また白楊樹がマッチの軸木材として、東京深川の木材の基地に海路搬送されるようになった。その頃、金融機関の支店の無かった野付牛では、木材加工業の丸玉産業が発行する金券が深川の花街でそのまま流通するという北見の木材ブームが起つたのである。また木材に係る業者・労務者がおびただしく北見地方に流入、ハッカと共に木材の街という名を得たのである。

当時、北見の森林の大方は国有林で、府県下の国有林を農商務省が管理していたのとは異なり、これを北海道では道庁が管理運営していた。そして道庁が官行斫伐という名で森林伐採を行ない民間に払下げを行っていたから森林官吏の住民に対する威信は、式典などにおける制帽・制服に海軍士官のような帯剣姿とともに新開の名望家のいない地域にことのほか官尊民卑の威をもって君臨していたのである。第二次大戦後、北海道庁の管理から府県下と均しく農林省の林野庁が管理するようになり、道東の林野行政は新たに設けられた北見営林局が執行することになった。局は昭和三〇年、多数の営林署一事業所と二千二〇〇人の職員を擁し、北見市はその城下町となったといつても過言でない。伐り出された木材は民間の製材・パルプ工場から零細な木工業者にも払い下げられたが、昭和三〇年の網走支庁管内の木工場は一四七工場、その生産量は二三万立方メートルに及んだ。昭和三五年北見に赴任した私は、北見駅・留辺蘂駅などの裏が幅数十メートルから長さ数百メートルに達する駅土場に木材が山積する光景と市内の製材工場の操業帯鋸の高い音に驚いたものである。これらの木材は規模の大きな合板・パルプ製紙・鉛筆軸木から経木・桁・建具・家具・曲物・割箸・妻楊子等に至る製品として全国に移出されたのである。その影響で、かつてハッカ・葉豆など農産物取引で賑った小都市としては規模が大きいといわれた、料亭から居酒屋に至る店舗が、公務員・業者・林業労働者で大いに賑ったのである。その頃学校教員として勤めの帰りの居酒屋で、造材

関係者が札束を持って汚れた髷面のまま山を降りてきて暖簾をくぐると女将に私たちなどは「アンタ達またおいで」と追い出されたものである。

北見の木材関連業は、第二次大戦下、木造船をはじめ多様な需要で乱伐され、また昭和二九年の洞爺丸台風で道東の森林に大量の風倒木を出した。これらの時期、北見の木材加工業が激増したが、天然林の枯渇とともに次第に廃業に追い込まれた。北見の山にあるのはかつて炭坑の杭木として利用された人工植林のカラ松で、クセとヤニの多いカラ松材が最新の技術によって集成材として防腐・加工され、家屋の建材・木工遊具・道東にはびこるエゾ鹿の防柵として利用されている。そして北見の木材企業は、アラスカ・シベリア・東南アジアから輸入する外材を加工する苫小牧・釧路などの港湾都市にかつての繁栄を譲ってしまったのである。今北見では、建材・フロア・建具・遊具・ログなどに高度の加工技術をもち、年に一度「木のプラザ」を中心にオホーツク「木」のフェスティバルが開かれており、期待を集めている。また水源を保護し、森林を憩いの場とする緑化運動が盛んになっており、それが住民にとつての環境保持と結びついているが、この地方の新しい観光産業との結びつきも期待されるのである。ただ北見ですっかり住み古りた私には、春先の街の製材工場の帯鋸の甲高い音、秋ハツカ工場から街の中心部まで風に乗って漂ってくるハツカのさわやかな薫りが無性になつかしい。

北見の農業

平成一〇年代の北見市を含む網走支庁管内の農業の規模は、農家戸数約六千五〇〇戸、農民人口約三万人を擁し、年粗生産額一千六〇〇億円を挙げ、他産業が衰退する中、最も強く安定した産業となっている。北海道の農村

は广大で各地それぞれの特徴を有している。札幌から空知・上川地方に入ると各百万石の米の産地といわれるが、石北峠を越えて北見の国に入ると、青空の日が多い埴質壤土の盆地・平野部に入る。そして夏期高温できわめて多種類の農作物の作付が可能だといわれる。空知から狩勝峠を越えて十勝の火山灰地、釧路・根室の低温・濃霧の地方のいずれも経営面積は広いが、作付が限られ、酪農に限られている。北見も十勝も畑作地帯だが、その作付の態様は大きく異っている。

低い丘陵の多い北見地方は、北風を防ぐゆるやかな丘陵の傾斜地で、除虫菊・ハッカ・亜麻などが栽培されていたが今は平野部を含めて、小麦・ビート・馬鈴薯のいわゆる三品の輪作が行われている。それに収量日本一といわれる玉葱に加え水稲などの栽培が行われている。まず水稲についてみると、北見では昭和初年の土功組合の造田事業とともに稲作が普及したが、年々冷害凶作に苦しんだ。それに対し農民の育種家、安斉義信、江頭利雄らの血のにじむ工夫努力と北見農業試験場の職員の品種改良で冷涼なこの地方の稲作を定着させたのである。北見地方の水稲は比較的病害虫の被害が少く、植付け収穫の機械化が早くから行われ、最近の地球温暖化のためか夏期高温となり、最近稲作に好適な条件が揃ってきているが、現在では米作の団地造りが進み、またうるち米よりも「はくちようもち」品種など、製菓原料としてのもち米造りの需要が製菓業者によって高められている。水稲の作付面積は八〇〇ヘクタール程で、他の作物に較べると零細である。

俗に三品といわれる作物の一つ、北見の麦類は、かつて農民が主食としていた裸麦、軍馬の飼料としていた燕麦が盛んに栽培されていたが、昭和七年政府が小麦増殖五カ年計画を立て小麦の増産に乗り出したのである。第一次大戦後、国民の食生活が変化しパン食が普及すると、小麦の需要が米に次いで重要な地位を占めるようになったの

である。しかし当時は小麦を大量に輸入していたので、農業恐慌対策のほか、国際収支改善策として作付が奨励されるようになった。小麦はまた商品作物として農民の間に普及したのである。とくに網走支庁管内は作付が急増し、昭和一六年には一万八千ヘクタールに達した。このようなことから野付牛町に日清製粉株式会社の工場が建設され、北連がその販売に力を入れるようになった。大戦後小麦の生産は一時低下したが、朝鮮動乱で世界の食糧需要が高まると、食糧の国内自給をめざして食糧増産計画が立てられ、中でも小麦は学校給食の食材として需要が高まった。また昭和四五年から始まった稲作転換が奨められ、休耕田に麦作が増加するようになった。やがて世界的な人口増加による食料危機打開のため、小麦は期待の大きな作物となってきた。

麦類は盛夏に収穫に入るので辛い農作業を伴うが、昭和五〇年代からコンバイン・ハーベスターと乾燥調製施設が導入され、苦役のような肉体労働は改められた。そして機械化体系の確立とともに生産者は作付面積を数十ヘクタールに拡大し共同組織をつくり高効率な麦作が行われるようになった。昭和五六年北見地方ではチホクコムギの品種が開発され、麵用の良質な品種としてそれまでの北海道産小麦のイメージを一新し、さらにハルユタカが育成されると作付面積を大いに拡大した。なお平成一五年の網走管内の麦類作付面積は二万四千七〇〇ヘクタール、北見市はそのうちの一千七〇〇ヘクタールを占めている。平成一八年の端野・常呂・留辺蘂町との合併によって北見市の作付は大幅に増大している。

馬鈴薯は明治三〇年の開拓民の入植とともに栽培され、屯田兵に対し「ごしよいも屯田」というアダ名が冠せられたように貴重な主要食料の役割を担ってきた。しかし商品としては、当時の低い輸送力では運搬費がかかるので、輸送の容易な澱粉に加工されて販路が拡げられていった。第一次大戦に入ると澱粉好況の波に乗って馬鈴薯が

急激に作付を増大、その後、冷害によって水田が畑地に還元されると更に作付が増大、昭和一二年以降戦時体制が始まると、米に代る代替主食として、またガソリンに代る燃料用アルコールの原料として、またハツカ栽培に代つて増産が奨励された。昭和一五年野付牛町に酒精工場が建設されると馬鈴薯の作付が一層拡大した。第二次大戦後は主食としてまたとくに北見では良質のたね芋生産が行われ移出された。昭和三四年には北見地区合理化澱粉工場が建設され澱粉生産を拡大した。

太平洋戦争後の馬鈴薯の品種の推移を見ると、紅丸・男爵・メークインの栽培からワセシロが育成され、平成年代に入るとトヨシロなどのほか、インカのめざめなどカラフルな品種も育成されるようになった。しかし北見地方では、生食用の男爵が、その粉をふき糖度の高い味の良さを好まれ、全国各地に移出されている。平成一六年の網走管内の馬鈴薯の作付は一万八千五〇〇ヘクタール、北見市は七四八ヘクタール、平成一二年管内の粗生産額は一七〇億円程である。

次に道東で盛んに栽培されている冷涼な気候に適したビートと製糖事業は、明治初年から開拓使が育成政策に乗り出したが、個体が大きいため原料の輸送、製糖技術の難しさから発展しなかった。しかし第一次大戦下、ヨーロッパが戦場となり、砂糖が不足し価格が暴騰すると、北海道におけるビート糖業への関心が高まり、北見・十勝がビート栽培の適地とされ、栽培されるようになった。そして帯広に製糖工場が建設された。北見地方の方がビート栽培により適していたが、輸送手段に欠いていたこと、工場誘致をめぐる北見・網走・美幌などの争いが、工場誘致の失敗を招いたといわれる。第二次大戦後、砂糖よりも主食の作付が盛んで昭和三〇年頃までビートの生産は低いままに推移した。しかし昭和三二年政府が糖業振興策をとり、敏腕な北見市長伊谷半次郎が他市に先駆けて芝

浦精糖会社の北見製糖所が誘致されると、ビートの作付が急増し、北見市農協管下で、作付農家が一千二〇〇戸三年耕作面積が前年の一・六倍へと急増した。ビートのトップと砂糖を取ったあとのバルブは牛の飼料として好適で、厩肥が耕地に還元されるのでビートと酪農・土地改良と結びつけている。馬鈴薯・麦類の栽培が地力を減耗するので、ビートは輪作・酪農の振興に不可欠の作物とされている。ちなみに平成一五年の網走管内のビート作付けは二万七千ヘクタール、反収六千二〇〇余トンで連年ほぼ一定している。平成一二年の生産額は約二五〇億円である。

北見における玉葱の生産は今や日本一となっており、玉が固く貯蔵性があり味がよいので、東京の中華料理店やラーメン屋の調理場のかたわらに北見・遠軽などの農協の名を入れた玉葱の二〇キロ入りのダンボール箱をよく目撃することがある。この玉葱も、北見における栽培の始まりは、大正六年に常盤町の武井菅治、川東の植松多助、旭町の新井田善造らが札幌の興農園より種子を入手して試作したときと伝えられている。しかし北見ではタマネギバエの発生、その駆除法が判らず作付が広がらなかったのであるが、その後合理的な駆除が行われるようになり、北見タマネギが全道一の生産地となったのは、昭和四六年であったと伝えられている。ここまで生長した北見玉葱は、栽培技術や販売での業者との協調・競合など北見玉葱振興会の果たした役割が極めて大きいといわれている。

玉葱は米麦ビートなどの作物と違い、政府による価格支持も共済制度もなく、その栽培史の中では価格の暴落や雹害などの災害をしばしば経験してきた。また生産過剰で廃棄処分などの苦渋の体験もある。一方玉葱の品種改良、一代雑種の育成栽培、機械化の促進、また貯蔵と消流、商人との駆引などにも耐え鍛えられてきた。また北見は消費者の住む大都市との距離が大きく、国鉄・トラック業者との輸送についても幾度も苦渋の体験を経てきた。

また規格外品が少くないので、ソテー、生ミンチ、コロッケ、スープなど新たなニーズを開発するなど、玉葱産業は北見農民とその組織の血の滲む労苦と創意工夫の所産であり、この知的努力が今日の北見玉葱を築いてきたのである。株式会社グリーンズ北見・北見市農業技術センター・北海道オホーツク圏地域食品加工技術センターの玉葱に関する研究指導に多くの成果を得てきたが、今後への期待も大きい。近年、玉葱は、香港への輸出が試みられているが、ロシア・インド・中国などの大国への輸出が期待されており、北見農民の力量を示す機会を創ることが必要であろう。

北見地方は多種多様な農作物栽培の適地といわれるが、青エンドウ、大豆、小豆、インゲン、金時、花豆等の栽培・出荷の歴史をもち、近年は留辺蘂町における白花豆は平成一四年六四一トンの生産を挙げている。また蔬菜等についても、ホウレン草、メロン、人参、いちご、大根、南瓜、キウリ、アスパラ、キャベツ、スイートコーン、白菜の育成が行われ、花きも作付けがみられ、上常呂地区では長いもも出荷されている。

次に酪農と畜産についてみると、北見地方では大正一四年森永練乳会社設立されたのが乳業の始まりであるが、第二次大戦後、食糧難で多くの乳牛が屠殺され、牛乳の生産が低下、深刻な事態となった。昭和二九年酪農振興法が制定され、間もなく北見地区に対し集約酪農地区指定が行われた。四〇年代には、酪農家の専門化が進み、生乳のバルククーラーによる冷蔵が行われ、タンクローリ車によるクーラーの集送乳が行われるようになった。昭和五三年乳製品の市況が低迷したうえ、安価な農畜産物の輸入が拡大したが、これはわが国がアメリカ・オーストラリアなどに自動車を輸出する見返りに、わが国が安い農産物を輸入させられた結果である。この事態は今日まで続いている深刻な問題である。

昭和五〇年代に入ると、日本人の牛肉に対する需要が広がり、これに応じて北見でも黒毛和種が導入されるようになった。この飼育は専業の乳牛酪農家ばかりでなく、水田・畑作農家の副業経営にも適し、粗飼料で寒さにも強く、地力増進にも役立つといわれる。

酪農家にとって最大の関心事は乳価の問題であり、そのために連年、生乳の出荷価格上昇の運動が展開されている。平成二〇年、輸入している配合飼料が、バイオ燃料の需要増の影響で価格が上昇しているが、今までの乳価の引き上げも、配合飼料代の高騰で吹き飛んでしまったといわれている。なお網走管内の乳畜産の生産額は平成二二年で約七〇〇億円で農業生産額の約四〇％という高い比率を占めている。

最近輸入食品の安全、途上国の人口増による食糧需要の増大、国際緊張の中で、わが国の国民の食糧の確保は重要な政治・経済上の課題となっている。このような状況下、わが国の食糧の自給率が四〇％というのは寒心に耐えないことで、国民に安全な食糧を充分確保するにはわが国農村の振興・再生が不可欠なのである。又北見地方では農民、とくに若い世代の農民の離村が、耕作地の減少、それに後継者不足などの地域崩壊、限界集落化を生じているが、最近都市の企業から析出されてしまって、収入も住む場所も失っている青年達を農村に吸収できないであらうか。

観光の変容

平成年代に入り、企業が北見を去り、市街地商店街の人影が疎らとなったのは既述のとおりだが、市内にカネとヒトを確保するには市内への入込人口の増大、すなわち観光開発が必要である。

道東には、北見と距離のある層雲峡・網走・阿寒・知床などのそれぞれを周遊する観光地があり、北見への来往は少く、北見は観光客のトイレ通過点などといわれている。最近では団体観光バスが市街にある国道三九号線を通らず、バイパスの広域農道を通過しているといわれる。また市内の観光拠点、オホーツクビール館・ハッカ記念館・仁頃名水記念公園・富里湖森林公園の入込みなど、果たして賑っているのだろうか。それでも平成一〇年代に入つて、市内中心部にあり次いでビジネスホテルが建てられ、観光客と支店・出張所の北見撤退に代る出張ビジネス客の入込は約六〇万と伝えられ、彼らが市内におとすカネは七〇億円と伝えられている。この経済をいかにしてより拡大すべきか重要な問題である。

しかし私の言いたいのは、最近の観光は団体の名所周遊から個人滞在型へ移行していることである。個性的な自然と食材・住民との交流が大切になってきたのである。これを一つ紹介すると北見出身の若い音楽家の「オホーツクブルーの 仁頃の青い空 華麗に赤い エゾミンソハギ あたり一面 ほのかに香る ハツカ忍ばず 愛の園 安らぐ癒しの花模様」に象徴される新型の観光である。大都市の激しい生存競争、雑踏と騒音、刺戟に疲れた現代人に蘇生をもたらす北見の風物が観光客ないし一時の滞在者にこよない癒しをもたらすのである。それは職場を退いた高齢年金生活者の園芸を含むハウスでの長期生活をも視野に入れることも可能であろう。

北見市政の今昔

北見市に定住してから私は五〇年近くなる歳月を経たが、その間に市職員の気質・性格・行動の取り方も相当の変化が感じられる。具体的な例を挙げてみると、昭和三六年前ころ、市の駐在員宅に、北見市に転入した場合、その

証明書を発行してもらふことになっていた。そもそも駐在員という制度は、戦後わが国に進駐してきた米軍当局が、町内会・部落会を軍国主義の温床として過度に敵視し、その解散を強行したため、市町村では止むを得ず、町内会に代わる出張所や嘱託員を配置したものであった。北見市でも駐在員規則を定め、「住民実態把握事務」などのため、北見市に長く住んでいて声望があり世話役のできる人と現職の市の幹部を含む年配の人びとにこの職務を委嘱したのであった。そこで私が駐在員宅にうかがったところ、妻女から駐在員の主人が不在であり「在宅のときに来て欲しい。勤務先の市役所の都合で在宅時間を決められない」とのこと、私は三度目の訪問でようやく証明をいただき、翌日これを市役所の窓口を持参して、住民登録をすることができた。また駐在員に、他所から来たばかりの私に色々身辺についてせんさくされ、威圧感を覚えたことであった。札幌市から転出するときは、市役所の窓口で事務的に手続をとってくれたのにと北見市の扱いが権威的で煩瑣に思われたことであった。このことはわが国の大都市には、まだ閉鎖的な共同体の風習が残っていたことを意味する。その後昭和四二年に住民登録法が廃止され、駐在区ごとにまとめられていた住民台帳も市に移管されてアイウエオ順に改められたことを知った。また用事があつて市役所に赴くと、部課を示す掛札は下っているもの窓や戸口は室内の見えぬスリ硝子であり、職員の上は簿冊が積み上げられており、秘密主義の行政姿勢がうかがわれたものであった。当時市役所のそばの雑貨店では、店の片隅に坐椅子が並べてあり、その店で常連らしい退庁後の市職員が腰掛けてよくモッキリというコップ酒を飲んでいたものである。また退庁時が過ぎても、事務室の中で簡単な酒肴を前に向かい合つて小さな酒盛りを行っていたものである。そんなとき中年の職員が年若い下僚に仕事の仕方などをくつろいで話をし、ときに雰囲気盛り上ると二・三〇メートル程の下町の居酒屋やスナックなどに繰り込んでいる光景がみられたのであつ

た。ところが平成一四年一二月二八日の夜、市職員約四〇〇人が市庁舎内で御用納めの職員慰勞会が行われた。これは市内の八部四〇課が互いの慰勞と親睦を目的に毎年行われ、その費用は職員が課内の親睦会費で積み立てたものであった。酒宴は午後九時頃まで続いたという。ところがこの行事の七日前に市職員の酒気帯び運転人身事故があり、市民から「市役所は一体何を考えているのか」、また「残業でもないのに遅くまで暖房を使い灯りをつけたり、だれがその使用料を払うのか」と憤りの声が挙つたのであった。さらに最近、市の職員から私が聞いた話だが「この不景気の中で、年末手当を受けても街の中で酒を飲んだりすると市民から厳しい視線を向けられるような気がする」という。街全体を掩う不景気風の中で、市職員は身銭を切つて浩然の気を養うことも遠慮しなければならぬような雰囲気があるのだろう。このような市民の厳しい視線の生じてくる背後には、景気の悪化に伴ううっ積した不満イライラ、その掘つてくる根本因は、国の政治・経済にあると考えられるのだが、不満の捌け口は、先ずは第一次的に政治・経済にかかわる市に向けられがちである。この市民の不満に応えようとして、平成一一年北見市長選挙に立候補当選した実業家出身の神田孝次市長は「北見のマチは不景気、まず経済を強くすることを必ずやりたい」「民間企業なら倒産寸前」と市の財政を指摘、行財政改革を進め、その後の財政改革に歩を進めた。

ところがこの前年の雪印乳業北見工場閉鎖、北見営林支局の国有林野事業の再編での道森林管理局北見分局への縮小整備、まるしよデパート閉店、北見魚菜卸売市場の民事再生法適用申請、北海学園北見大学の一九九年閉校、山上建設等地元企業の民事再生手続、北陸銀行北見支店閉店、ふるさと銀河線廃止、北見東急百貨店の撤退等北見市が誇る諸事業が相次いで廃止され、「われわれの街は一体どうなつていくのか」と市民の不安な感情は増幅した。そんな雰囲気の中で、平成一九年一月一九日、市内春光町の団地の中で、ガスの継ぎ目はずれ一酸化炭素

中毒で三名の命が失われ、一人が病院に収容されるという衝撃的な事故が発生した。これは前日異常な臭気に気付いた住民の知らせに北ガスの職員が機敏に対応しなかったことが原因だが、市長の対応が遅れたことを指摘する声をも生じさせた。敢ていうならば、市長はいち早く現場に駆けつけ被害者を見舞い、前年施設譲渡した北ガスに対し、過失の責任を追求し、損害賠償とガス管の補修を求めるべきであった。

さらに六月二三日と七月二四日、二六日の大規模大断水は、北見市民に大きな被害をもたらし、この報道が全国に伝えられたが、高濃度の濁水が浄水場に流入したことを知りながら取水を続け、この後断水が続いたがこれを自然災害として過失を認めない市側の姿勢が、ホテル・飲食業者をはじめ市民の怒りを買ったのであった。これに対し、断水の原因を調査した断水技術調査委員会（委員長海老江邦雄北見工業大学名誉教授）は自然災害といわれていることについてそれは「間違いである」と明言、「原水がいかなる高濁でも水道水準基準以下のレベルまで処理できるとする対応は受け入れることが出来ない」という判断を下している。

施設に対する不満は、具体的には市長と市議会に対し、議会傍聴席への市民の出席増加、議事空転の際の怒声、「どっち向いて政治やってんだ」「市長も議員も次の選挙覚悟しろ」などと悪罵が、ヤジの中止を求める議長の声をかきけすようになった。なかでも平成一七年三月七日から開かれた市議会では、合併前の旧常呂町助役で市の代表監査委員に就いていたA氏による町長交際費の領収書焼却問題では、これをかばい続けた市長や与党市議への怒りは頂点に達した。時折傍聴席に臨み、又翌日の新聞報道で事態を知った私は、かつて読んだ堀米庸三編「世界の歴史3中世ヨーロッパ」の中の二五八年ヴァレリアヌス帝の迫害に遭って殉教した神父聖キプリアヌスの書簡——ローマの都市の急角度の衰退を画いた一文——のことを想起した。「いまや世界そのものが語り、ものみなの凋落によ

つて自らの終末の近いのを証している。冬には種子を育てるほどの雨がなく、夏には穀物を稔らすほどの照りもない。疲弊した山々から切り出される大理石はいよいよ少なく、掘りつくされた鉱山は金銀の産出いよいよ乏しい。田園には農夫の影なく、海には水夫、軍営には兵士の姿を見ず、広場には無私、法廷には正義、交友には和合が失せはてた。だが血気あふれた青春の力を、誰か老年にも保持できるといえよう。すでに衰退の道を降って終わりに近づくものは、何人として力衰えるのをまぬかれない」と。この文の意を詰めていうと、街の経済の力が衰える、住民の和合もおとろえ政治も不公正となり混乱の中で街は衰退するという教訓である。これを市の老朽庁舎の再建をめぐる争い、ガス管・水道の事故、近年北見市の都市の基本施設をめぐる議会の論議の中にこの教訓を見てとることができよう。

ふり返ってみると北見市の市庁舎が建てられたのは昭和二九年であり、このとき庁舎には水道もガスなどの施設も完備した。当時の伊谷半次郎市長はその落成式において次のように述べている。「当市の中央に位置し、電気、通信、水道、ガス等の諸施設の完備した近代的鉄筋コンクリート造りでありまして耐震、耐火に特に意を用い、市のための施設としての信頼感を強めるとともに住民の利害に直結した重要文書の完全保存、災害時の救助及び治安維持の中核としての機能を果す：（以下略）」と。この式典には、札幌市長をはじめ道内一〇市の市長が招かれて出席したが、市長たちは、戦後の不況の中人口五万二千の小都市にガス・水道施設のある鉄筋コンクリート建築物を一体どうやって建てたか驚嘆したと伝えられている。

この市役所庁舎建設を「北見市議会史」から調べてみると、戦後の混乱がようやく落ち着きを見せ始めた昭和二八年、伊谷市長は議会に対し、取敢ず四千万円の財源をもって庁舎を建設する案を示している。その財源の内訳は、

先ず市長が市のために五年前に神戸の地主から一坪一千円で三〇〇坪買った土地を北見電報電話局に坪七万円で売却して得た二千一〇〇万円と自家保険金の手取金一千二〇〇万円及び消防庁舎建設のための繰越金五〇〇万円等であった。これを財源に建設工事に着手することの原案を可決したのであった。またこの審議に当って市長は、市有地に建っている北見郵便局敷地を郵政省に買ってもらう交渉を進めていることを明らかにし、この交渉が成功しなければ五〇〇坪三階建て、成功すれば一千坪とすることを明らかにした。

この審議にあたって質疑に立った議員は石崎彦次・近田清一・似内哲郎だが、いずれも伊谷市長の与党で、石崎は日専連北見支部の創設者、近田は北見商工会議所専務、似内は農機具工場創立者でいずれも権謀術数に長けた人たちである。また他人に容易に同調せぬ性格を備えた人達で、伊谷がこれらの人と手を組みながらリーダーシップを執り得たのは、それまでも不可能事を可能にしてきた業績と人格的威望によるものであろう、またこれに先んじて北見市上水道とガスの必要を議会に訴えたのは昭和二五年三月の議会であるが、上水道についてはすでに二三年一〇月、北大理学部教授福富忠男に上水道探索を委嘱、細かな調査を経て二五年三月上水道設置に関する水道事業案を市議会で議決、一億八千万の起債とその償還方法を明らかにして工事に入った。また二七年一月、北見市がガス事業経営に取り組む案が議決されたが、これには二千万円の起債（内一千五〇〇万円は政府資金・五〇〇万円は公募債）をもって事業に着手することが明らかにされた。これらの事業は、伊谷市長が常々「水道・下水道・ガスが揃っていないと将来の都市整備ができない」と語っていたことを具体化したものであった。さらに伊谷とその後継の滝野市長は、小泉住宅団地と常呂川にはさまれた地点に一億円をかけて終末処理場を完成、高水炉床式による家庭排水を浄化するもので、このとき人口八万の都市に「全道はおろか、全国的にも誇るに足る施設」（昭和四

一年北海道新聞社刊・都市診断北海道編）と絶讃されたものであった。このほか昭和二〇年代から五〇年頃にかけて、北見市が行った数々の都市整備事業は、道路整備・公園緑地整備・緑ヶ丘霊園の建設ときわめて盛んであり、これらの建設整備をめぐって市長と議会の審議はきわめて活発であった。その背景には昭和二〇年代末からのわが国経済の高成長、北海道苫小牧東部開発など経済効果があり北見市のような地方都市の経済を潤し自治財政を豊かにして、その余沢が市政を活性化してきたという追い風があったことが否めないであろう。それが昭和四八年の中東戦争をきっかけとして起ったオイルショックによつて経済成長が破られ、わが国の実質GNPが四九年から戦後最初めのマイナス成長に陥り、このために五〇年度から道・市町村の税収減、市町村財政の危機をもたらししたことも確かである。しかしそのような財政難の中でも、昭和五十一年に始まった寺前武雄市長の施政では、市内の小中学校の増改築と新築が、人口増の中でも達成された。また小山健一市長の下で平成九年に着工した新しい廃棄物処理施設・リサイクルプラザの建設も財政窮迫の中ですすめられた事業であった。

しかし、先人の市長と議会、ひいては市民たちが苦心して整備してきたガス施設・上水道施設が永久不変のものでなく、補修と改良が必要なことを、後世の我れ我れ市民に痛烈に知らしめたのが平成一九年の二つの大きな事故であった。

また、市庁舎が老朽化してきたこと、新築が必要になってきたことが話題になったのは、昭和六二年市長の座に就いた久島正市長の時であった。久島氏が当選して間もなく北見工科大学長林正道と図書館長であった私がホテルの一室に招かれ市政や大学のことで懇談したとき、久島新市長は新しい市庁舎は、本拠を現在地に、現業的な分庁舎を相内と上常呂に設け、情報機器でこれらを繋ぎたいと語ったことがあった。この腹案の新しさに私は驚いたこと

であつた。しかしその後小山健一市長・神田孝次市長と交代したが、庁舎の新築をめぐる争いが、二人の市長の運命を大きく左右したことは否めない。この争点は議会内にまた市民との間に架橋できぬほどの抗争を招き、市政を停滞させたことは否定できないであろう。現在北見市の市政担当者・議員・さらに市民にとつて求められることは、前述のローマの都市の衰亡の故事を教訓として、また昭和二〇年代から三〇年代へかけての、市政担当者の英知とすぐれたリーダーシップ、市民代表の人々の対立の克服、一致協力の故知にならつて衰退した北見市の経済の再建に力を合わせることであり、これを支えるいわゆるマックス・ウェーバーのいう市民の主体的意識と参加であらう。

深い危機感を持ち市民が力を合わせることが、市の衰退を食い止める手がかりとなるであらう。